

# 私の視点・哲学の視点

佐 藤 徹 郎

本稿は、2008年2月23日、新潟大学新潟駅南キャンパス（CLLIC）で行われた私の最終講義「私の視点・哲学の視点」の記録である。掲載に際して、同じ言葉の繰り返しや冗長な部分を省き、舌足らずな箇所は適宜加筆修正した。また当日は、あらかじめ配布したプリントに基づいて講義を行ったが、紙数の都合でプリント自体は収録せず、論旨の理解に必要な部分だけを、本文中に抜き書きの形で挿入した。

拙い講義にもかかわらず掲載をお勧め下さった編集委員の方々に感謝したい。

I

本日は、お忙しいところ、また悪天候にもかかわらず、遠方から私の最終講義にご出席いただきましてまことにありがとうございました。退官記念ということでこのような機会を与えていただき、大変ありがたく思っております。

私の講義に出席された方は皆ご存知かと思いますが、私はいつも講義の準備の手際が悪く、大抵講義をする日の朝まで何をしゃべろうかと考えています。実は、これは最終講義でありますから、一ヶ月くらい前から万全の準備を整えて……と考えるだけは考えたのでありますが、結果としては私がこれまで続けてきた講義と全然変わらない状態で、今朝まで何をしゃべろうかと考えていた次第です。

お手元に資料をお配りしました。最終講義というには忸怩たるものがありますが、しばらく辛抱して聞いていただければと思います。

私はたまたま哲学というものを職業にすることが出来て、その点では大変運がよかったと思っております。しかし、自分が哲学を職業・職責としてやってきたという意識は全くありません。私の職務という面から見れば、この最終講義でも哲学の教育・研究ということが問題になるのですが、今日おいでくださった方々と比較すると、私は大変怠け者でして、教育上研究上の業績ははなはだ貧しいものであると自覚している次第です。

それとは別にして、私には小さいときから一種の哲学的な問題意識がありました。今考えてみると、私が哲学に近いことを考えたのは、多分6歳か7歳の頃のことだったと思います。現在の視点で振り返って見るならば、私は哲学少年であって、哲学青年であって、哲学中年であって、まあこれから哲学老年になるであろう（笑）と思うのであります。それで、せっかく与えられた機会ですから、大雑把で雑駁な議論になるかと思いますが、自分の考えていることを自由にお話させて頂きたいと思います。

昔から哲学のことを考えていたと申しましたけれども、私にとって二つの大きな問題がありました。そのことをあまり皆さんにお話したことがないので、この機会にお話することにします。一つ目の問題は、哲学について考え始めた最初の頃に気づいたことです。哲学的問題に関心があったので、私は、哲学に関する本を真面目に真剣に読み、長い時間をかけて一所懸命に考えました。その結果どういうことになったかと言いますと、必ず人と意見が一致しなくなるのです。深く考えた結果、深く人と意見が一致したという経験が私にはありません。「全くない」と言えばちょっと言いすぎかもしれませんが。たとえば、私はウイトゲンシュタインという哲学者についてかなり本を読んで翻訳を出したりもしましたけれども、全体としてウイトゲンシュタインと私の考えが一致したと思ったことは一度もないのです。私は、哲学について議論する友人を何人か持っておりますが、それについても同じことが言えます。もちろん意見が一致しないことと「あなたとは意見が一致しません」と言うことは別問題です。特に日本では多くの場合「あなたとは意見が違う」ということは礼儀を欠くこととされるわけですから。

ただ、私が一度も迷わなかったのは何かというと、人と意見が違った時に自分の意見をそのまま持ち続けるということです。もちろん他人の目から見ると、私那不勉強である、あるいは間違っているということかもしれませんが、自分自身で考えたことでないと、私にとってそれは哲学ではなかったのです。だから私は、他人と意見が違う時は、いつも自分の意見をとにかく持ち続けました。それが一点です。

もう一つの問題は、さらに弁解がましくなるのですけれど一応お話ししておきます。今述べたように、私にとって考えることは何か身に付いたものであって、哲学的に考えない私というものは考えられません。では書くことはどうかというと、これは全く違うのです。これも私に近い方なら多分ご存知でしょうが、私はめったに手紙などを書きません。なぜ書かないかというと、論文であれ、手紙であれ、書くということは私にとっては非常に重荷だからです。極端な例を挙げると、私は先生から本を頂いてお礼の返事を書かなかった、そうしたら先生の方から、いらぬなら破棄してくれという手紙が来ました(笑)。それに対してはさすがに謝罪の手紙を出したのですけれども、まあそういうような状態であります。ウイトゲンシュタインという人も、私と一緒にしては大変失礼ですが、生前はほとんど本を出版しなかった。しかしウイトゲンシュタインは、実は哲学について何万ページものノートを書き溜めていたのです。そういう欲求が私には全くありません。哲学を職業にしている以上、哲学について何か考えたのであれば、それを世に問うのが、研究者・教育者としての責務であろうと私も思うのですが、簡単に言うと私はそういうことを放り出したままで、こうして業を終えることになりました。退職すれば多少暇にはなると思いますが、おそらくあまり変わらないのではないか。これは決して業績をあげなかったことの言い訳になるものではないのですけれども、そういう私の性分として、我侬を理解して頂ければと思います。

II

退職に際して昔のことを振り返ってみますと、小さい頃から色々考えてはいたのですけれども、高校の頃から少し哲学の本を読むようになりました。何冊か読んだ中で印象に残ったのは、プリントに書いた三冊です。

《3冊の哲学書》(プリントより抜粋)

高校から大学の初年にかけて何冊かの哲学書を読んだが、印象に残っているのは次の3冊である。

- (1) デカルト『方法序説』
- (2) パスカル『パンセ』
- (3) ラッセル『私の哲学の発展』

(1)からは「考える姿勢」のようなものを学んだ。

(2)はかなりの期間愛読し、いろいろな影響を受けたと思う。

(3)を読んで、論理学とウィトゲンシュタインについて知ったことが、後に哲学に転向する伏線となった。ラッセルについてももっと知りたいと思い、『哲学の諸問題』、『西洋哲学史』など、ラッセルの著書を数冊読んだが、この本ほどには興味がもてなかった。

どれもいわゆる科学哲学とかいうものではありません。ただ一つ私と共通する点は、デカルトもパスカルもラッセルも理系と文系と両方をやった人だということです。私も理系と文系の両方に関心があったので、これらの哲学者に関心をもったのかもしれませんが。デカルトの『方法序説』は誰でも読みますけれども、私が惹かれたのはデカルトの説ではなく、最初の方に出てくるデカルトの考える姿勢でした。終日炉部屋に閉じこもって思索し、ただ一人間の中を歩む者のように、独立独歩で進む、そういう姿勢に感銘を受けたのだと思います。

パスカルの『パンセ』を挙げることは、意外と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、これはかなりの年月にわたって愛読していた本です。この本から色々影響を受けたとっております。もう一冊、ラッセルの『私の哲学の

発展』という本ですが、ラッセルという人は非常に多方面の哲学者でして、論理学を始めとして、社会問題から平和運動まで非常に幅広い領域に携わった人です。『私の哲学の発展』というのは哲学的な自伝です。ラッセルの本は何冊か読みましたが、私に一番影響を与えたのはこの本であると言えます。

先ほどのご紹介にもありましたように、私は高校生の時に高木貞二の『解析概論』という有名な教科書を少し読んで感銘を受けました。それで最初は数学者になろうと思っていました。ところが、東京大学に入ってから数学科に進学したところ、そこで最初の挫折のようなものを体験したわけです。当時はブルバキズムというものが数学で非常に流行していた時代でした。数学の世界ですら流行というものはあるのであります。

#### 《ブルバキとヒルベルト》(プリントからの抜粋)

当時はブルバキ—フランスの匿名の数学者集団で、その代表者の1人が、アンドレ・ウェイユ(シモーヌ・ウェイユの兄)である一の『数学原論』が一世を風靡した時代だった。ブルバキはドイツの数学者ヒルベルトの打ち出した公理主義、形式主義の思想から影響を受けて、現代数学を抽象的な「構造」の理論として統一しようという壮大なプロジェクトを企てた。『数学原論』は、この構想のもとで書かれた一連の教科書である。

(スライドを示して)これは私が大学の頃買ってまだ持っている『数学原論』(*Éléments de mathématique*)のうちの集合論の本ですが、私のやっていた数学とは勝手の違うものでした。例えばこの本には、数学の理論というものはある種の式の列であると定義してあります。つまりそこでは数学とはどういう意味を持つかが問題ではなくて、一種の形式的な構造が数学である、という姿勢が強く打ち出されています。私はどうもこういう考え方には馴染めませんでした。私と同じ頃に数学科にいた人のうちに、最近『国家の品格』がベストセラーになった藤原正彦さんがいます。あの人とは高校が同じでよく将棋をさしました。彼は非常に集中力のある人で、数学者として立派になったのですが、私の

方はというと、当時囲基部に入っていて、基ばかり打っていました。そういうことをしているうちに数学からは落伍していったわけです。

(スライド) これはブルバキという匿名の数学者集団の一人で、アンドレ・ウェイユという人です。この人は、シモーヌ・ウェイユという思想家のお兄さんです。確か仲はよかったはずですがけれども、シモーヌ・ウェイユとは全く違うタイプの人でした。

数学科にいた時に、私は、論理学の本と、「不完全性定理」で有名なゲーデルの論文をいくつか読みました。そのことは私が哲学に移ってから多少役に立ちました。私の研究題目の一つに論理学と書いてあるのですが、これといった業績を出したことはありません。ですが数学に対するある種の興味は今でも持っています。特に最初に言ったように他人と不一致であるということに悩んでいると、数学というものは誰にとっても必然的に成り立つということが非常に魅力的だったわけです。

このように数学に魅力を感じたのは私だけではなく、後に出てくるカントをはじめ、フッサール、ラッセル、ウイトゲンシュタインなども皆同じです。こういう人たちはある時期数学をやって、数学について色々なことを語っています。しかし私はやはり考えれば考えるほど、こうした人たちと意見が一致しなくなっていくのです。

(スライド) 私は数学科にいた頃に、パズルが好きで色々なパズルの本を読みました。そこで、実は一つ簡単なパズルをやってもらおうと思って持ってきました。地球の周囲はおよそ4万キロメートルですが、その赤道が仮に針金で出来ていたとします。それに1メートル継ぎ足した時に、どのくらい地球の表面から浮き上がるかという問題です。もう一つ、私のウエストが82センチだったとして、そのベルトに1メートル継ぎ足すとお腹から何センチ浮き上がるのだろうか、という話です。

(聴講者との問答の後で) 簡単に答えを言ってしまいますと、実はこの二つの

答えは同じなのです。最初の針金が4万キロメートルだろうが82センチだろうが、浮き上がる半径は同じということです。それは $\frac{1}{2\pi}$ メートルと計算されますので、16センチぐらいになります。

(スライド) こちらのスライドは、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、ケーニヒスベルクの橋という有名なパズルについてのものです。ケーニヒスベルクの中心には島のようなものがあって、そこにカントの墓があるらしいのですが、その近辺の川に7つの橋がかかっています。同じ橋を渡らないで全ての橋を渡ることができるかという問題です。オイラーという18世紀の大数学者が、これは不可能であるということを証明しました。これは数学で言うところのトポロジーという分野に関係します。

数学の命題は分析命題であるか総合命題であるかという論争がずっとあったわけです。分析命題というのは、例えば「妻は女である」というように、言葉の意味によって必然的に真にならざるをえないような命題です。それに対して総合命題というのは、カント流に言えば認識を拡張する、つまり新しい知識を与えるような命題であります。先ほど公理主義という話題が出て来ましたが、公理主義とは、いくつかの公理を前提にして、極端に言えば自動的に定理が導けるような形式的体系として数学の理論を展開しようという方向をめざすものです。公理主義者だからといって、必ずしも数学は分析判断だと言うわけではありません。しかし、公理主義的な数学観は、数学の中身を経験的な事柄から切り離して純粹に形式的に扱うという方向を示しているということができると思います。

それに対して、先ほどのパズルを例にして、数学というのはどんな役割を果たすのかを考えてみますと、例えばズボンのベルトはどのくらい浮くか、あるいはすべての橋を特定の仕方でも渡れるかというように、結局我々の経験の可能性を問うていると解釈できます。数学で何かが証明されたという場合、我々の直感でいうと可能であると思われることが実は不可能であると分かったり、逆に不可能であると思われることが可能であると分かるというようなことが起こ

ります。つまり我々の経験の可能性の範囲がそれだけ限定されるわけです。したがって数学というものはある意味で総合的である、と私は考えています。そうするとカントに賛成できそうに思えるのですが、カントはそこに、単に総合的であるだけでなくアプリアリであるという限定をつけています。私にはカントの考えが必ずしも正しいとは思えないということをここで述べておきます。

### III

少々話が横道にそれたので、ここで哲学の話に戻りまして、専門でもないのにおこがましいのですが、カント哲学について触れたいと思います。私が初めてカントを読んだのは、大学の教養学部の学生の時でした。今も出ている岩波文庫の翻訳で読み、分からないところはとばしました。その時にどういうことを考えたのかというと、大変不遜な話ですが「カントは間違っている」と思ったのです。後に私は哲学科に学士入学しましたが、当時哲学科には岩崎武雄先生というカント学者がいました。入学する時にどういう方か知りたいと思い、岩崎教授の『カント』という本を読みました。また入学してから、岩崎教授の演習でカントの『純粹理性批判』の一部を原文で読みました。しかし私の考えは根本的には変わりませんでした。四十数年前に初めて読んでから、これまで時々カントを覗いてきたわけですが、勉強することによってカントと同一化するということが私にはなかったのです。もちろん「カントは間違っている」と考えた理由の一部は、おそらく私の知識不足による誤解であろうと思います。しかし今考えてみると、本当の理由はもっと本質的なものであって、どういう視点から世界を見るかという根本的な問題に関わっているのだと考えます。そこでプリントの2ページには、「この機会を借りて、カントの『純粹理性批判』のテキストの一部を参照しながら、私とカントの相違点について説明することによって、私の考える哲学とはいかなるものかを明らかにしたい」と書きました。これは最終講義ですから、私も少し学問的な議論を展開する予定で、このプリントももっとずっと長くなるはずだったのです。しかし今朝になって「そんな話をしている時間はない」と気づきました(笑)。だからこの残りは、羊頭狗肉



のお粗末な話になってしまうことをあらかじめお詫びしておきます。

ただ、カントの場合に限らず、私の考えは最終的にはどの哲学者とも一致しませんでした。カントを槍玉にあげたのは、ただの一例にすぎません。つまり「ヘーゲルは間違っている」でも「ハイデガーは間違っている」でも全然構わなかったわけです。カント哲学に関しては、私はそれを間違っていると思いましたが、軽視したわけではありません。そこで扱われている問題は哲学の根本的な問題に関わると考えています。それは、要するに「私」ということです。昔のカントの紹介では、先ほどの「先天的総合判断」云々とか、理性の限界とかいうことが、カントの主な問題だと考えられていたかもしれません。しかし、私の理解する限りでは、「私」ということがカントのより根本的なテーマになっていると思います。たとえばデカルトの場合は、『方法序説』でも『省察』でも「私とは何か」ということが主題になっていることは明らかですけれども、実はカントにとっても同じだったのではないかと私は推察しています。私自身もそうでしたが、多くの人々にとって哲学は「私」というものを考え始めることから始まるのではないかと思います。例えば私が小学生の初めの頃こんな童話を読みました。犬の王様がいて、自分の子供たちが非常に頼りないので、自分が死んでも子供たちがちゃんとやっていけるのか見届けたい。それで睡眠薬を飲んで自分が死んだことにして葬儀をするのですが、実は棺の中からそっと抜け出して自分の息子や娘たちがどんな風に生きているか確かめに行きます。で、息子も娘も立派にやっているのを見て満足して、もう一度薬を飲んで今度は永遠に眠りにつくのです。

今でも覚えているくらいですから一種の感銘を受けたのだと思いますけれども、その時に考えたのは、「私」というものがなくなった時に世界はどうなるのかということでした。平凡なことではありますが、ここで私に自覚されたのは、感覚も知覚も考えも想像も記憶も、全てがこの「私」の感覚、この「私」の知覚であり、この「私」の考えだということ、それ以外のものは私には何も見えていないのだ、ということでした。

さて、そういう風に一人で考えているだけならそれでいいのですが、それを

哲学として語ろうとすると非常に奇妙なことが起こります。デカルトを読むと分かると思いますが、本当に「私」だけ、ということは語りうるものではなくて、実は哲学者は、それを全ての人に共通の普遍的な事実として、つまり「全ての人にとって」「私」が感じ得るのは私の感覚であり知覚であり考えであり想像であり記憶である」と語るわけです。その時に「私」の意味は、最初の時点では「この私」だけに自覚されているものだったのが、実はあらゆる人、哲学用語で言うなら主観一般というものにまで拡張されて行きます。ここに「私」というものについて哲学的に語ることの奇妙な構造があると思います。そのことを非常に詳細に、かつ明晰に語ったのは永井均さんという人です。

この奇妙な構造は、実は多くの近代哲学の場合に共通しています。例えばヘーゲルだったらどういう風に考えるかという、恐らくこの「私」は私だけのものであるという確信は未熟なものにすぎないと言うでしょう。つまり、「この私」ではなくて私一般ということを考えられるようになって、人間は一步成長したのだというのがヘーゲルの見方だと思います。しかし、私はそういう風には考えませんでした。私の推察するところでは、多分カントもそういう風には考えなかったはずで、カントについては膨大な研究がありまして、私もプリントでもう少し紹介するつもりでしたが、それはやめておきます。私の理解するかぎりでは、カントの一つの問題は、全ての経験がこの「私」の経験に過ぎないという認識をあくまでも保持し続けたかったということであったと思われまゝ。しかも一方において、あらゆる人にとって共通の認識というものが成立しなくてはならない。その間に一つ橋をかけたかったのではないかと思います。カントの哲学は「超越論的観念論」と言われますが、カントはこれによってそういうことを達成したと考えたのではないのでしょうか。先ほども言いましたように、カントについてはものすごく沢山の解釈があって、中には読むと読む前よりもわけがわからなくなるという解釈もあります(笑)。プリントに引用した中島義道さんという人は、何はともあれ非常に明快に結論に切り込んでいくところが私は比較的好きです。中島さんはどういう風に見えるかという、〔カントの哲学では〕私が客観的世界もその世界における物体も数学的世界も、他者の心(こころ)も自分自身の心(こころ)でさえも、幻覚や夢も、

およそこの世にあるものすべてを構成するのだ。私とは、このような構成する能力を持つものとしてはじめに設定される。これが根源的自我（純粹統覚および超越論的統覚）である。」（中島義道『カントの自我論』14-15頁）。先ほど私はヘーゲルのように考えなかったと言いましたが、カントのように考えませんでした。中島さんの解釈が正しいかどうか、私には保証できませんが、もしも中島さんの言うようなことがカントの目論見だったとすると、そのカントの意図には成功の見込みが果たしてあるのでしょうか。

プリントの4ページ目にカントのテキストから一部引用しました。

「我々が先験的（超越論的）感性論において十分証明したことであるが、空間あるいは時間において直観されることのすべて、従って我々にとって可能な経験の対象は、すべて現象に他ならない。」（『純粹理性批判』B 519（高峯一愚訳））。

これはいわゆる現象というものと、物自体とを区別した、カントの比較的有名な箇所です。私がこれを読んでどうしてカントが間違っていると考えたのか。私にとって問題になるのは、ここに書いてある「従って」という言葉です。「従って」ということは、空間あるいは時間において直観されることは全て我々にとって可能な経験の対象であるということを意味しています。これはカントに限ったことではなく、近代哲学の一つの傾向であるかもしれないと思います。カントが空間とか時間とかいうものを物自体に関して成立するものではなくて、我々の直観の形式に過ぎないと言ったことは、非常に有名です。その後を読んで頂くと分かる通り、カントはこのことを何度も何度も繰り返しています。

「…空間そのものはしかし、この時間とともども、そしてこの両者と同時に一切の現象も、やはりそれ自身としては何ら物ではなく、表象以外の何ものでもなく、我々の心以外に全く実際に存在しえないものである。」（B 520）。

「…空間と時間とにおいて在るもの（現象）は、それ自体或るものではなく、われわれのうちに（知覚のうちに）与えられないとすれば他のどこにも見いだされないと、単なる表象なのである。」（B 522）。

そうはいつでも具体的に何を考えているのかイメージが湧きにくいかもしれ

ませんが、その前後のところを読みますと

「知覚と、この可能な知覚から他の可能な知覚への経験的進展以外には、現実には何ものも与えられていない。……知覚に先立って現象を現実的な物と称するのは、われわれが経験の進行においてそのような知覚に出合わざるをえない、ということの意味するものでなければ、それは何ら意味のないことである。」(B 521)。

「太古以来わたくしの現実的存在に先立って経過して来た一切の出来事というのは、やはり現在の知覚から発して、これを時間上から限定する諸制約に向って、上へ上へと遡源してゆく経験の連鎖の引き延ばしうるかぎりの意味するものにほかならない。」(B 523)。

こういうような言い方で、「私」の現在の意識は、可能的には、宇宙の森羅万象に関わりあっていくものである、少なくとも時間空間の中にある外界存在というものは、私の主観との関連において構成されていくのだということを書いているのだと思います。

これは近代哲学において多かれ少なかれ普遍的に見られる論法だと思いますが、私がこういう考えに惹きつけられて近づいていったということは全くありません。私にとっては「私の経験とは何か」ということがそもそも問題であると思われまます。私というものがデカルトの言うような意味でここに存在して、一切合切が私に対して現象しているのだと考えたとき、私はそこに一つの時間とか空間とかいうものの形成を認めるかもしれません。しかし私が言いたいことは、およそ時間とか空間とかいうものが設定し得るのだとすると、それは私の存在に限定されるものではないということです。私の存在そのものに限定される時間・空間というものは、私にとってはそもそも時間でも空間でもないということになるわけです。私が設定した時間・空間の中で私もいずれは死ぬ。しかしそれによって時間と空間というものが終わるわけではありません。これは空間的に言っても同じことですけれども、私の世界というものは私の存在しない世界にまで広がっているのだというのが私の考えたことです。カント自身も、時間とか空間とかいうものが自分が死ぬことによって終わる、あるいは自

分が存在する以前の時間・空間は存在しないということは言っていますが、カントは可能的経験という概念に基づいてそれを説明しようとするのです。しかしそもそも、私の身体も意識も存在しないところに一つの経験というものがなおかつ想定できたとしても、それは決して私の経験ではない、私の可能的経験ですらないということになります。もしカントが考えるように、可能的経験が時間・空間内のあらゆる現象に伴い得るのだとすると、それをなぜ「私」と呼ばなくてはならないのでしょうか。結論としては、そういうものを設定するとしたら、それは全ての出来事における神の臨在、つまり神がありとあらゆる所において、ありとあらゆる出来事を見守っているということを想定するのと何ら変わりがないのではないかとということです。

先ほどパスカルを愛読したということを申し上げましたが、パスカルという人は厳密な意味での哲学者ではありません。ただパスカルは哲学にも非常に鋭い感覚を持っていたと思います。プリントの5ページにパスカルの言葉を引用しています。

「そもそも自然のなかにおける人間というものはいったい何なのだろう。無限に対しては虚無であり、虚無に対してはすべてであり、無とすべてとの中間である。両極端を理解することから無限に遠く離れており、事物の究極もその原理も彼に対して立ち入りがたい秘密のなかに固く隠されており、彼は自分がそこから引き出されてきた虚無をも、彼がそのなかへ呑み込まれている無限をも等しく見ることができないのである。」(『パンセ』B72 (前田陽一・由木康訳))。

ここで「虚無」というのは、無限小を意味すると考えてください。パスカルはレトリシャンですからこれは一つのレトリックとして読むことも出来ます。しかし、私はこれをある意味で真面目に読むわけです。そこで大事なことは、自分が経験していないことは無限にあると認めることです。例えばこのビルの屋上が今どうなっているかということを私は全く経験していないし、多分誰も経験していないでしょう。ところが多くの人は、どうなっているかというこ

とは分かるであろう、可能的経験によって、今見ている知覚体験とつながっているという風に考えるのだらうと思います。しかしパスカルが言うように、自分が原理的に体験できないものが宇宙の中には沢山あるのだと思います。詳しい議論は省きますがそれは私にとっては自明の事実であると思えません。そして私の経験から世界にあるすべての存在が構成されないとすれば、別の人の経験を持ってきてもそれが構成されるということはありません。例えば私はアリストテレスを知っていて、アリストテレスについて考えることが出来ます。しかし、アリストテレスは私の精神が構成したものではないし、ましてアリストテレスの精神が私を構成したということはありません。アリストテレスの精神にとって私という個体は存在していなかったのですから。つまり自分の体も意識も存在しえない領域にある対象を構成するということが出来ないはずであるというのが私の考えです。

#### IV

私はウイトゲンシュタインが好きですが、彼の考えは、今言った私の考えとは根本的に相容れません。例えば彼は自分が死ぬ時に世界が終わると言っています。可能的経験ということを持ち出さずにこう言い切ってしまうのはある意味ですごいことですけれども、だからといってこれが正しいとは言えないというのが私の言いたいことです。先ほども言ったように、ウイトゲンシュタインに根本的に賛成したことはありませんが、いくつかのアイデアをウイトゲンシュタインから学んだように思います。「私」というものは私だけのものだといっても、これはどうしても共通の「私」というものになってしまう、つまり「私」という言葉がウイトゲンシュタインの言うところの「言語ゲーム」の中で機能することによって、共通の「私」というものが不可避的に設定されてしまうというのが、私が彼から学んだことの一つです。別の言葉で言えば、我々が何かを意図する、あるいはこういうことを言いたいと思うことによって、言葉が私の言いたい意味を担うというものではないということです。例えば極端に言うと、私が論文を書くのが面倒くさいので、こういう風に一つ単語を書いて

において、「これが私の考えたことである」と言うとしめます。念力によって、私の考えたことをこの言葉に込めようとしても、それは全く意味がないわけです。さらに思考についても同じことが言えます。思考というものが心の中の言語を使って自分自身に語っているのだとするならば、役割を担っていないような言葉は実は意味することが出来ない。「独自の私」ということを念力で思考しようとしても、それが「私」の独自性を表現することは出来ない。つまり「私」という言葉は、結局自分だけのものであるという意味を担っていないのであって、共通の地平で機能せざるを得ないということです。

さらにワイトゲンシュタイン自身は語っていませんが、私は彼から全く別のことも学びました。言語ゲームという思想を突き詰めていくと、共通の「私」といっても、ある言語ゲームの中でのみ機能を持っているのであって、我々がそこから離脱すると、そこで設定されている「私」からも離脱してしまうということになるわけです。神秘的なことを言っているように聞こえるかもしれませんが、ある意味では簡単なことです。例えば私はよく碁を打ちますが、囲碁をやっている時には、私は囲碁というゲームをする主体として機能しています。私が囲碁というゲームをやっている限りにおいては、私が打ったのがいい手であるとか悪い手であるとかいうことは、客観的な意味を持ってくるわけです。ただもちろん囲碁をやめてもいいわけです。私が囲碁をやっていなければ、私が同じように振舞っていたとしても、やっていることの意味は全く違ってきます。

このような考え方は、他の色々なことにも適用できます。人が遊びとしてやっていることだけでなく、人が真剣にやっていることも、動かしがたい「現実」とみなしていることも、一つのゲームとして捉えることができます。例えば、大学にお金がないとします。大学同士で資金を獲得する競争をすることはできます。これは一つの大学間のゲームです。そういうゲームを設定したとすると、そこでは企業の評価と同様に、お金を儲けた大学、財政的にしっかりした大学が良い大学であるということになります。一方で我々は、そういうゲームから撤退・離脱することもできます。離脱すると、同じ現象でもその意味は

変わってきます。例えばお金が儲かることは何ら良いことではない、極端に言うとう原始キリスト教のように、お金を儲けること自体が悪いことであるという観点だって十分に成り立つわけです。

もちろん哲学もまたある種の言語ゲームとみなすことができます。哲学では、「この私」について語ろうとして、共通の「私」を設定せざるをえないということは前に述べた通りです。この「私」の共通性は、哲学にとっては大きな問題ですが、他の学問では問題になりません。他の学問では、共通の「私」というものは、初めから当然のこととして前提にされているのです。さらにまた、たとえば集団、共同体、あるいは法律とか経済とかいったことを考えた場合、我々は単なる「私」ではなく、「我々」という共同の主体を設定せざるをえない、設定しなければ何も始まらないと言えると思います。しかし、だからといって共同体の視点が絶対的なものだというわけではありません。一旦そういうゲームから離脱してしまうと、そこにあるように見えた共同的主体は意味がなくなり、同じ現象でも全く違う意味を帯びてくるのです。私がプラグマティックであるという話がありましたが、それに関して言えば、私は、一定の枠組みの中で行動していても、その枠組みからいつでも離脱できるように思うし、実際に離脱してきてしまったわけです。しかし、一つのゲームをやめたからといって生きるのをやめることが出来るわけではありません。一つのゲームをやめたならば何が残るのだろうか、これが私にとっては重要な問題でした。私はこれまでのところ哲学的な問い、哲学的な思考から離れることができませんでした。しかし、哲学の学派といったようなものは、私にとって何の意味もありませんでした。カントが設定しているような超越論的自我・根源的自我・純粹統覚及び超越論的統覚といった枠組みにしても、私にはそれが哲学において根源的なものであるとはどうしても思えないのです。一方で私は、他人と異なる私という視点を、ずっと保持しようとしてきました。私にとって最後に残るのは何であるかを強いて言うとする、もちろん他人というものも残るわけですが、他人とは異なる私自身が残る。それからもう一つ、私というものは世界の中にあるわけで、その世界というものが残る。これは決してカントが言うように、「私」とか精神とかから構成されたものではありません。つまり



人間にとって共通であるということではなく、ありとあらゆる存在にとって共通の世界であると言いたいわけです。私が何をしても世界の中で起こるのであって、世界の中で起こらないようにすることは出来ない。誰にも知られずに死ぬにしても、誰にも言わない痛みを感じるにしても、そういうことは世界の中で起こってしまうわけです。それは世界の中の一つの出来事に過ぎないのであって、それを人が主観的に認識・経験しようとしまいとあまり関係がないというのが私の最後に考えたことであります。最後は何か神がかつたような話になりましたが、ここでワイトゲンシュタインの言葉を一つ引用したいと思います。

Der Philosoph ist nicht Bürger einer Denkgemeinde. Das ist, was ihn zu Philosophen macht.

哲学者はいかなる思考共同体の住民でもない。そのことが、彼を哲学者にするのだ。(ワイトゲンシュタイン, *Zettel* 455)

これは私にとってワイトゲンシュタインの中で特に印象に残る言葉の一つです。

私にとって哲学とは、多くの人々が共有する概念から距離をおいていくことにありました。私が正しいのだと言うつもりはありません。しかし自分が考えた末に達したことを、私は常に保持し続けました。時代の風潮や尊敬する人の言葉によってこれを変えることはありませんでした。結果として私は、色々な人と意見を異にすることになりました。残念に思うのは、私と考えが違ふのは当たり前のものであって気にすることはないのに、学生の皆さんの中には私を傷つけまいとして黙っていてくれた人がいるかもしれないということです。学生に限らず同僚・先輩の方々を含め、皆様がこれまで私に寛大に、かつ好意を以て接して下さいたことをありがたく思っております。最後に皆様のこれまでのご厚誼に感謝しまして、私の話の終わりとさせていただきます。